

2013年10月25日

札幌市長 上田文雄 様

一般社団法人 北海道自然保護協会
会長 佐藤 謙

伊藤邸敷地および住居の保全、ならびに市による買い取りに関する要望

要望項目：

今後のあり方が新聞などで報道されている札幌市中央区北5条西8丁目地区の伊藤邸の敷地について、以下の2点を要望いたします。

1. かつての豊平川扇状地の扇端附近に分布していたメム（湧泉地）の地形と植生をとどめる伊藤邸敷地および住居を保存し、市民の憩う札幌市街地中央部の緑地として、また札幌が立地している豊平川扇状地のかつての面影を残す場として、将来にわたって市民に愛され、利用されるよう、札幌市が買い上げることを要望いたします。
2. 現在の邸宅はそのまま残し、かつての豊平川扇状地の自然（地形や植生など）および豊平川を利用した札幌の発展の歴史を説明し展示するメム館として活用することを要望いたします。敷地内の一隅にある校倉造り風の建物は道内には他に類はなく貴重なものと思われるので、併せて残し、保存することを要望いたします。

理由：

札幌市は豊平川扇状地の上に発達してきました。豊平川は度重なる洪水など災害をもたらしましたが、一方では、豊平川の流水や伏流水は恵みとなり、札幌の発展を支えてきました。

豊平川扇状地の末端（扇端）にあたる知事公邸付近やJR線路周辺には北1条から6条にかけて東西にメム（湧泉地）が点在し、市民の憩いの場として親しまれてきました。しかし、市街地化とともに多くは埋め立てられ、また1960年代には地下水の汲み上げなどによって、地下水位が低下し、残ったメムも涸れてしまいました。しかし、知事公邸や北海道庁、北大植物園、北大中央ローン

に見られるように、一部では揚水などによって現在も開拓当初からの水辺風景を保っています。

伊藤邸敷地内には、図に示しますように、かつてはメムがあり、そこからの流れはかつての偕楽園（現在の清華亭はその一部）にあったメムの水をあわせてサクシコトニ川として現在の北大中央ローンを通して北へ流れ、競馬場あたりで旧琴似川に合流していました。また、北大植物園のメムから流れ出る川（セロンベツ川）は現在の北大農場を通り、サクシコトニ川と合流していました。

市中央部では、多くのメムはなくなってしまいましたが、知事公邸や植物園とそれに続く伊藤邸敷地付近には、かつての扇端部における離合集散した流れの痕跡やメム特有の起伏に富む地形や植生が残されており、とくに伊藤邸敷地は個人所有ということもあり、かつてのメム独特の地形や本来の植生がそれほど改変されずに残っています。

植生に関しても、伊藤邸敷地は、札幌市の中心部にもかかわらず、北海道開拓時代の自然の姿をとどめており、本来地続きであった北大植物園や北大構内、北大原始林などとほぼ同じ種類の植物が生育する大変貴重な場所です。

春には敷地を囲む通りから見える場所に春の植物の代表的なフクジュソウやオオバナノエンレイソウが咲いているようすをよく見ることができます。今では市街地に少なくなったエゾエンゴサク、キバナノアマナ、ニリンソウ、アズマイチゲなども北大構内と同じく生育しております。特筆すべきは、メムのある扇端や河畔沿いに生育するハルニレの大木が数多く残されていることです。また、屋敷林として本州から移植されたケヤキの大木（推定 130 年ほど）が敷地を囲み、数多く残されており、ケヤキは北海道には自生していませんが、数多くの大木は北海道開拓の歴史を象徴する森として貴重です。

このように、伊藤邸敷地は北大原始林、北大構内、北大植物園、大通公園へと連続性を持った市街地では、地形的にも植生の上でも極めて価値のあるものです。伊藤邸敷地は、札幌市の自然財産として後世へ残すべき非常に貴重な緑地と考えます。

さらに、敷地に建つ現在の建物は、10 数年前に建て直されたものと聞いておりますが、まわりの自然に調和しております。この建物を残し、植物園、道庁、知事公邸を含む周辺の豊平川扇状地におけるサッポロの原風景のようすを示すとともに、その後の札幌市街地の発展を市民や札幌を訪れる人々に説明する資料館として利用することは建物にふさわしいことと思います。

グーグルマップより



札幌市街之図
(北海道廳, 明治 44 年)
赤枠は伊藤邸敷地

